

## 消しゴムを追放しませんか？

### ある授業風景

⑥「晴れの日と、くもりや雨の日の気温の変化の特徴を自分でまとめて下さい」と教師。すると、子ども達は、次々と発表してくれました。

A「晴れの日、気温の変化が多い。くもりや雨の日、気温の変化が少ない」

B「晴れの日、気温の変化が大きい。くもりや雨の日、気温の変化が小さい」

C「晴れの日、気温の変化がすごい。くもりや雨の日、気温の変化が変わらない」

など、いくつかの意見が出ました。

⑥「そうだね、どれも同じことを言いたいんだと思うけど、こういうときには、＜変化が大きい＞と言います。」

理科支援員がAくんのそばに行って、

支「ここさっきなんて言っていた？ ＜大きい＞って書いた方がいいっていったら」

と指摘すると、その子は、すぐに消しゴムを出して消そうとしました。

⑥「いやいや、消さなくていいんだよ。自分の書いた＜多い＞という言葉に線をひいて、＜こういうときには大きいを使う＞とかアカペンなどで書き加えておくんです！」

と思わず話しました。

### 消しゴムを追放すること

ここからは、前回も紹介した新居信正さんの文章です。引用は『つるかめ算＜楽しい文章題への道＞』（仮説社、1983 ←⑥が教師になった年）からです。

子どもたちは、授業中でのまちがいを「悪か不名誉か恥」みたいに思っている。特に算数・数学科においてはそれが顕著である。だから、教師は授業運営の中で「まちがったから、かしこくなるのだ」ということを体験させる必要がある。つまり目的意識的に「まちがいのススメ」を授業運営の中にとり入れていくというわけである。その一つの方法として、消しゴムの追放がある。

誤答を消しゴムで消してしまうと、どこをどうまちがったのかわからなくなる。それで消しゴムは追放して、誤答はエンピツで2本線を引いて消すようにするのである。そうすると、正解がわかった後でもう一度見直したとき、

「ああ、ぼくはここをこうまちがったのか。なるほど、あのときはああいうように考えたからまちがったのだナ」

「あのときは、このところに目をつけなかったからひっかかったのか」

「われながら愉快的なまちがいをしたもんだわい」

などと自分のノーミソの歴史がよくわかり、かしこくなるために大いに使えるのである。

(115ペ、下線部は尾形)

「消しゴムで消さなくてもいい」のではなく、積極的な意味として「消さないということを授業で生かす」ことが「まちがいを大切に授業」につながります。口でいくら「教室は間違ふところだよ」といっていても、先生がいつも正答を要求していると、間違ふことを隠そうとする子が出てくるのです。パソコンにもちゃんと ~~≡なのが~~ こんな機能がありますね。

消しゴムの追放については、これまた前回紹介した『授業研究 21・2009年5月号』（明治図書）にも複数の人が書いています。たとえば、法則化運動の実践者（たぶん）もこうっている。

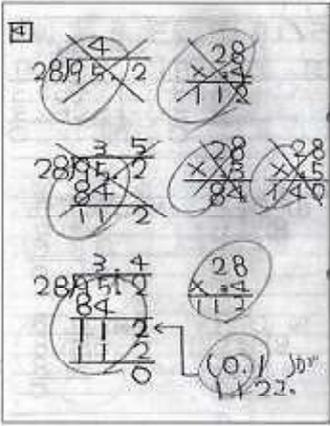
**特集「ノートスキル」が学力を伸ばす**

も必要だ。

消しゴムで消すとノートが汚くなる。

日本の宇宙開発、ロケット開発の父・糸川英夫博士は、「消しゴムを使うと独創力がつかない」「間違ったらしつかりバツをつける。そしてもう一度やり直し、率直にその間違いを認め、それに立ち向かう力を養うことが必要」と話す。

1問に1ページ使ったノートである。



×がたくさん書いてある。

×に対して、「きちんと×を残した」とことをほめる意味で丸を付けさせた。

わり算の筆算で、商を立てて修正する場面。4を立てたら引けない。×を書いて書き直す。補助計算にも×をつける。消さない。そして新たに筆算を書き、ひとつ小さい3を立てる。こうすれば時間はかかるが必ず解ける。

このようなプロセスが重要なのだ。プロセスを×を書いて残しておく。

長い人生で、このようなプロセスをじっくり勉強する時期が絶対必要である。

これをコソコソと書いてはすぐに消して計算しようとするから、誤字脱字が増える。間違えたら堂々と×を書く。

「ノートに×が多い子は勉強ができるようになります」と教師は自信を持って言う。

**第八条 補助計算を堂々と書かせる**

ノートの欄外に薄く筆算を書いて、消してしまう子がいる。間違いやすい。堂々と筆算を書かせる。

上のノートで、わり算の横にかけ算が書いてある。暗算でやる計算をきちんと筆算としてノートに書いたものである。これを「補助計算」と言う。補助計算を堂々と書かせることだ。

このようなノート指導をいつするか。毎時間毎時間するのである。

学期はじめに手本となる「ノートスキル

前ページで紹介した本は、25年前のもの。上の雑誌は今年のもの。

いずれにせよ、子どもたちに意識的にまちがいを大切にする授業をしようと思えば、消しゴムの追放は、その大切な教師スキルの一つとなります。

でも、これは、なかなかすんなりとは実践できないと思います。

やってみればわかりますが、子どもたちは大変抵抗します。それだけ、自分の記録としてのノートに「まちがいを残しておきたくない」のです。そんな子どもたちに、言葉だけで「まちがいをたいせつにしよう」と叫んでいても、なかなか心に響くものとはならないと思います。

ケアレスミスは消しゴムを使ってもいいんですよ。それはパソコンでキーボードを打ち直すのと同じです。

教師には、すでに自分の授業のやり方・パターンなど、自分の考え方があり、「消しゴムを使わせない」ということに対しても、子ども以上に抵抗のある方もおいでることでしょう。

でも「なるほど、そういうことか、それならばわたしも…」と思われる方は、ぜひ、実践してみてください。

そのときには<まちがいの保存と訂正の仕方>をしっかりと教えていく必要があります。